

—— 世界の教育現場での問題意識 ——

早瀬 明

コミュニティ・エンゲージメント（以下、CEと略記する）が必要とされる状況について、視野を少し拡大し世界の教育現場を見渡してみる。すると、社会の課題を如何なる視点から理解するかという立場の違いを超えて、学校教育と現代社会、特に地域社会の要求との間に隔絶が存在しているのではないかという問題意識が世界共通に生じてきているように見える。現代の大学教育の在り方について、最初に本格的にそうした問題提起がなされたのは、1990年代のアメリカでのことであった。それを反映してカーネギー大学分類にCE概念が初めて登場したのは、2005年のことである。そして、今やアメリカでは、CE概念は、大学と地域社会との関係の深度を示す概念として、大学評価の基準を与える原理にまでなりつつある。

ここで日本の中央教育審議会の表現を援用するならば、知識基盤社会を可能にする理論的専門知と実践的経験知の相互作用がCE概念の意味するものである。その前提に、現代社会の発展を支えるのは、絶えずイノベーションを繰り返す知識であり、そのイノベーションを可能にするのは、実践との絶えざる相互作用である、というプラグマティックな認識論が在ることは明白である。

知識基盤社会の概念が今後の世界に於ける社会の在り方の根本を示すとされる限りで、CE概念が今後の大学教育を支える主要な柱の一つとなるであろうことは容易に理解される。果たして同概念は今や世界各国の大学教育の中にその確固たる位置を占めつつある。その点でアメリカが最も先行していることは言う迄もないが、ここでは、本学のCEプログラムに大きな影響力を与えてきたと同時に今後も益々に与えることになるであろうマレーシア科学大学でのCEへの取組について、その基本的な考え方に絞って、簡潔に紹介してみる。

同大学のCEは、現在、Vice ChancellorのAsma Ismail教授の主導の下で発展途上にあるが、そこには次の様な明確な問題意識が貫かれている。即

ち、先ず何よりも、世界の変化が単に量的に速いというだけではなく、寧ろ質的に「破壊的」ですらあり、大学教育がそうした急激な変化への対応を迫られている、という強い危機意識が根底にある。抑々、同大学の教育研究全体は、現代の大学が、技術や経済システムの面でグローバルな規模で進行する破壊的变化に対応できるものでなければならぬ、という強い課題認識に支えられている。そして、CEも、そうした文脈の中に位置づけられている。即ち、グローバルな構造変化に晒されている地域社会が直面する困難な諸問題に対して大学の専門知を活かすために大学と地域社会とを結合するための通路となる、という役割がCEに期待されているのである。当然、そこでは、参加する学生や教員に、地域社会のローカルな問題をグローバルな視点から考察し分析することが要求されることは勿論、現場での社会的な実践の中で具体的な解決策を提案することが求められる。その意味で、CEは、破壊的なまでの社会的変化を生き抜く知識と知恵を地域社会の人々に提供する必要性を大学人に教える実践的教育の場であると共に、従来往々にして閉鎖的であった大学を社会へと開く社会貢献の場でもある、と言い得る。正に、理論的専門知と実践的経験知の相互作用の場がCEなのである。しかも注目すべきは、大学の社会的な在り方を模索する企てに於いて相乗効果を生むようなアジア発のグローバルな組織をつくる上でリーダーシップをとろうとする意欲が認められる点である。詰まり、本学も参加しているAPUCEN（Asia-Pacific University-Community Engagement Network）の創設である。我々は、アジアの時代の到来を、CEを通して実感することができる、とも言える。

はやせ あきら

（前コミュニティ・エンゲージメントセンター長 哲学）